

竈と貯蔵穴

千葉市周辺地域の古墳時代の事例から

小林 清 隆

1. はじめに

古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡である千葉市榎作遺跡は、千葉急行線の建設工事に伴いその一部が調査され、竪穴住居237軒や掘立柱建物等多数の遺構の存在が明らかになった。この成果については平成4年3月に、当文化財センターから報告書が刊行されている(註1)。

私は報告書の作成の大部分に関わり、「調査のまとめ」を執筆したが、その中で今後の課題と言う形にして、少しも突っ込まずに、いわば逃避して終わらせた部分が残つもある。報告書を見直してみると、「住居内の空間分割」、「貯蔵穴などの施設位置の変化と消長」、「住居の拡張あるいは焼失住居跡の個別事象」、「土器編年」などをテーマとして取り上げている。そして「問題は大きな山のように」として先送りとした。しかし、実際そのとおりで、積んだ山が大きくなり、取り組む意欲が萎えているのが昨今の実状となっている。ただ「土器編年」については、今後の調査においても避けてはとれないと考え、報告書の部分的な再検討を行い、村田川流域の古墳時代後期土師器の編年案を提出した(註2)。

本稿では古墳時代の竪穴住居内の竈(註3)の構築位置について、貯蔵穴の設置位置との関係から捉え、「貯蔵穴などの施設位置の変化と消長」について自分なりの解釈を試みようと思っている。

2. 竈と貯蔵穴の配置

竈の出現については、多くの議論がみられるものの、その時期、契機をめぐり決着に至っていないといえる。房総地域においては、いわゆる須恵器模倣の土師器杯が登場する前の段階に、竪穴住居内につくりつけの竈が導入されたと考えられる。その後、竪穴住居という住様式が継続する間、壁に接する竈の構築も存続し、そして竈自体は現在に至るまで基本的なスタイルを変えずに残っている(註4)。

る(註4)。

榎作遺跡では古墳時代から平安時代までの集落が明らかになったが、竈が付設される壁について、時期の推移とともにそれが変化する様子が捉えられた。すなわち竈導入期から時期的にさほど経過していない段階では、竈がつくられる壁が東壁と北壁が多く、古墳時代後期後半には、ほとんど北から北西の壁に変化し、その傾向が平安時代まで続くという状況である。このような現象は榎作遺跡の有する特徴になるのか、あるいは周辺の遺跡にも認められる傾向なのだろうか。

村田川右岸に立地する市原市草刈遺跡は、旧石器時代から近世にわたる大規模な複合遺跡として、全国的に知られている遺跡である。ここでの調査を担当した調査員の一人である渡辺修一氏が、床面の徹底した精査に基づき、「古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間」についての考察(註5)を著しているのので、それについてふれておこう。

渡辺氏は調査中まず入口位置の確定に努め、竈導入後の住居にあつては、竈と貯蔵穴の配置に着目し、住居の分類を行っている。そして時間的な推移について、Cf型＝「炉を有し、特定のコーナーに貯蔵穴を配し、その傍らに入口、カマドが位置する集中型」→C型＝「特定のコーナーに貯蔵穴を配し、その傍らに入口、カマドが位置する集中型」→FⅠ型＝「入口の対面にカマドを設け、貯蔵穴を入口側コーナーに設ける」→FⅡ型＝「入口の対面にカマドを設け、貯蔵穴をカマド側コーナーに設ける」→FⅢ型＝「入口の対面にカマドを設け、カマドのすぐ脇に貯蔵穴を設ける」という、C型からF型への流れを示した。また房総地域周辺でのあり方を検証したうえで、「カマド出現期住居の酷似性は驚くほど」であることを述べている。さらに論考は住居の空間分割に及び、住居を人の住む空間として仮説を展開し、生活の一部を視覚的にも復元している。

3. 榎作遺跡での推移

先程榎作遺跡での竈付設壁の位置的变化について簡単にふれたが、貯蔵穴とからめてやや詳しく見ていき、その後と同時に周辺の周辺について概観したいと思う。というのは渡辺氏の示した変化を確認する意味があると共に、その時期について明らかにすることも目的としたいからである。なお、以下に用いる時期区分は、筆者がすでに示してある編年案にしたがうものである(註6)。

報告書に掲載した全測図をご覧になって頂ければ明らかなように、榎作遺跡では遺構が著しい重複関係を有して検出され、新しい遺構に切られた古い遺構は、壁や竈の位置が不明になっている場合が多い。また出土遺物が乏しいことにより時期が明確にならない遺構もある。分析の対象はそれらを除外し、竈、貯蔵穴の設置場所が明らかで、かつ時期区分可能な遺構に限定した。その条件を満たす住居は85軒である。

1期 26軒を確認することができる。竈の設置壁は東側になる住居が最も多く15軒を数え、次いで北側が6軒、北東の壁に設ける住居が5軒となっていて、その3方向以外は見当たらない。26軒で貯蔵穴を有する住居は22軒で、設置しない住居が4軒である。したがって85%近くが貯蔵穴を保有していることになる。

貯蔵穴が設置されている位置は、1軒を除き住居のコーナーに近接した場所である。例外的な1軒は、竈の設置されない壁の中央に、壁に接するように掘られているが、位置的には竈の対向方向の壁ではない。東壁に竈を設ける15軒では14軒に貯蔵穴が有り、いずれも住居の中央から見て南東方向のコーナーに存在する。また竈についても東壁の中央に位置するのではなく、やや南に寄っていることが特徴である。北壁に竈が認められる6軒では半分の3軒にしか貯蔵穴が存在しないが、その位置もすべて南東コーナーである。

2期 15軒を比定した。竈が設置される壁は、北壁7軒、北東壁および北西壁が3軒ずつ、東壁2軒という状況である。1期で際だっていた東壁の優位は薄れ、北を中心にした向きが主流になっている様子が看取される。貯蔵穴の保有はやや低下して、全体の80%に相当する12軒に認められる。

貯蔵穴の設置位置は、住居のコーナーが6軒、竈の右側が5軒、竈の右側と竈の対向側の2か所

に存在するものが1軒ということになる。北壁に竈を設ける7例を詳しく見ると、南東コーナーの貯蔵穴が3軒竈の右側にくる住居3軒、もたない住居1軒という内訳になる。竈の右と竈の対向位置の2か所に貯蔵穴を設けているのは、北西壁に竈がある128住居である。

3期 18軒を比定した。竈が設置される壁は、北壁が13軒と多く、北西壁4軒、北東壁1軒である。2期に認められた東向きの竈は、本期には1例も存在せず、北中心から北-北西の集中傾向に変化しつつある様子が捉えられる。貯蔵穴の存在は13軒に認めることができる。前段階と比較しても極端な減少ではないものの、保有率は若干低下を示している。

貯蔵穴の住居内での設置位置が、コーナー部というのが一気に見られなくなり、122A住居1軒が認められるにすぎない。本期における特色は、貯蔵穴のつくられる場所がコーナーに接するというよりも、竈に近づくという傾向が顕著になる点にある。また竈の構築場所も壁長の中央部を意識している。貯蔵穴の位置は、竈を正面にみてその右側に存在する住居が8軒と大部分で、竈の左側が1軒、竈と対向する壁の中央張り出し部が2軒、竈右側と対向に1ずつが1軒である。

4期 15軒を対象にする。竈が設けられる壁は、北を向く壁に構築する住居が8軒、北西の壁が7軒という内訳である。本期においては、北から北西を向く壁への構築が集中する様相が顕著に認められる。

貯蔵穴を設けている住居は、3分の2に相当する10軒であり、緩やかながら保有率の低下が継続する。設置場所は、前の時期までは存在したコーナー部のものが1例も確認されず、竈の右側に置く住居が8軒と圧倒的に多く、左側1軒と、もう1軒が竈の右と対向する張り出し部の2か所に設けている。

5期 本期に比定できる住居は11軒と少なく、竈が設置される壁は、北壁が6軒、北西壁が4軒、北東壁が1軒である。北東壁が再び存在するが、北から北西への傾向は引き続き強いとみてよい。

貯蔵穴の存在を確認できた住居は1軒で、本期に至りその構築が急激に衰退したことを示している。1例認められる貯蔵穴の位置は、竈の右側である。

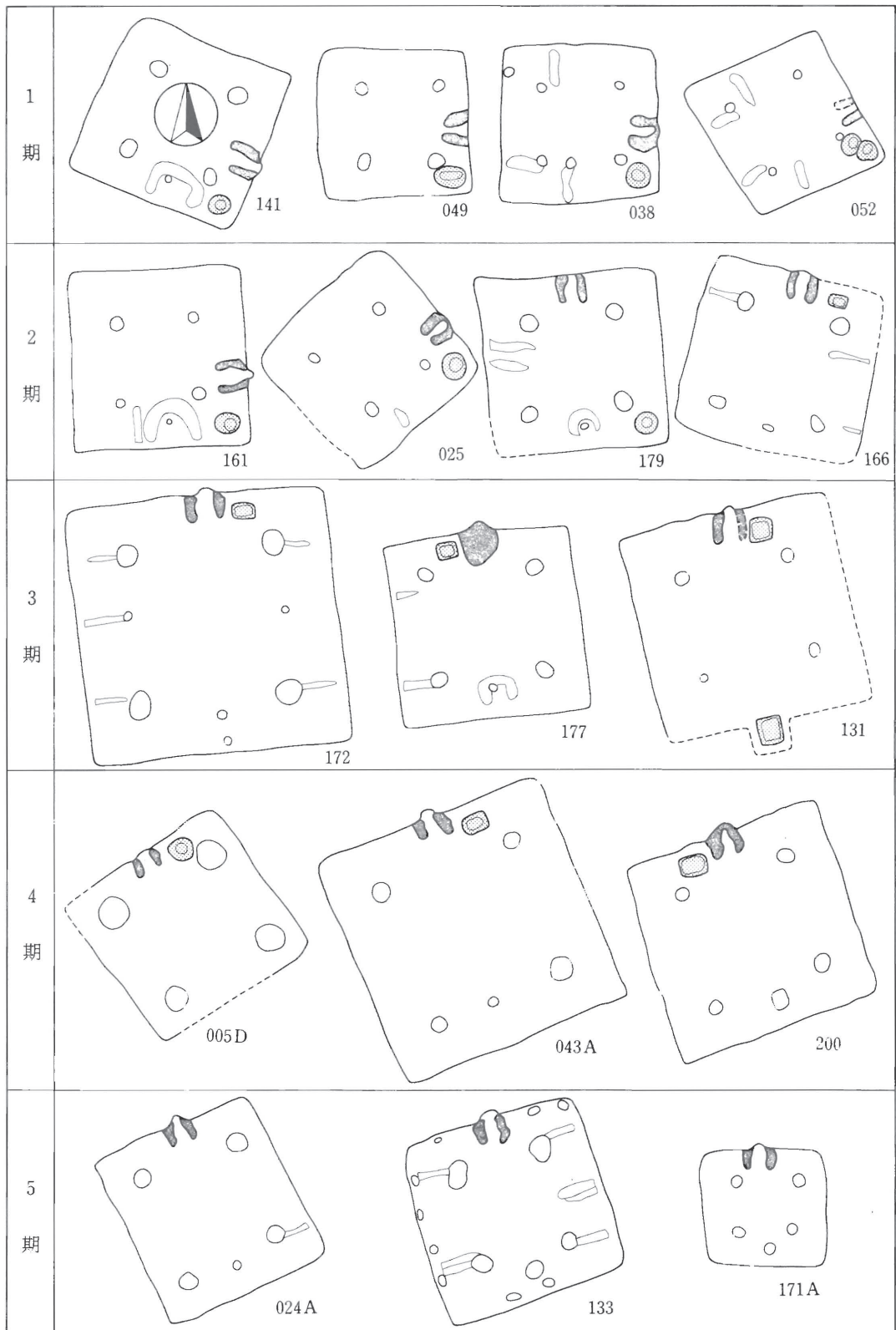


図1 榎作遺跡における各時期の竪穴住居 (1/200)

4. 周辺遺跡での状況

榎作遺跡における竈導入時期から7世紀代にかけての、竈を設置する壁の向きと、貯蔵穴の位置については前節のとおりであった。次に、同様な条件に基づき周辺の遺跡について調査をすすめることにしたい。なお、竈穴住居の時期区分は別表のように行ったが、それぞれの遺跡の報告者と、筆者の区分とに若干の相違が生じている部分もあることをお断りしておきたい。

千葉市谷津遺跡

榎作遺跡からみて谷を挟んで北側に立地する遺跡である(註7)。ここでも1期から5期にかけて営まれた竈穴住居が発見されており、そのうちの62軒を対象にして調査した。

1期は5軒である。竈が設置される壁は東と南東が2軒ずつ、北東壁が1軒で、すべてに貯蔵穴が設けられる。貯蔵穴の位置は、コーナー部が4例と、張り出し部が1軒である。

2期は15軒である。竈の付けられる壁が東壁である住居が8軒、北壁のもの6軒、北東壁が1軒である。貯蔵穴は14軒に認められる。コーナー部が10軒と多く、竈とは対向位置にならない南壁の張り出し部にある住居が2軒、竈の対向方向の張り出し部にあるもの1軒で、もう1軒が竈の対向方向の内側につくられている。

3期は17軒である。この時期では東壁に竈をもつ例が無くなり、北向きの壁への付設が9軒と過半数を占める。次に北西壁にある住居が5軒あり、他は北東壁2軒、西壁1軒という内訳である。貯蔵穴は15軒に存在する。コーナー部が7軒でやや多いが、竈の右側にくるものが5例と左側にあるもの1例があり、コーナーへの固執が薄れている状況を見せている。また竈の対向方向張り出し部につくるものが2軒存在する。

4期は18軒である。竈が付設される壁が北壁になる住居が8軒、北西壁5軒、西壁4軒、北東壁1軒となっている。貯蔵穴を設ける住居は8軒にすぎず、前期までと比較して減少傾向が顕著にみられる。コーナー部への設置は1軒にとどまり、竈の右側が3軒、左側が1軒あり、竈との対向方向の張り出し部に設ける住居1軒、竈の右側と張り出し部の2か所にあるもの1軒が存在する。

5期は集落が衰退し7軒となる。竈が付設される壁は北と北西の2方向で、前者が4軒で、後者

が3軒である。貯蔵穴は2軒にのみ認められ、どちらも竈の右側にある。

千葉市高沢遺跡

千葉市生実町と南生実町にまたがって所在していた遺跡で、350軒に及ぶ古墳時代から平安時代の竈穴住居が検出されている(註8)。古墳時代後期に比定可能な竈穴住居の数も、榎作遺跡に匹敵し、実に87軒が調査対象となった。

1期は集落の形成期で14軒を確認した。竈が付けられる壁は、東壁になる住居が最も多く10軒を数え、南東壁2軒、北壁と北東壁がそれぞれ1軒である。貯蔵穴は13軒に設けられている。位置は、12軒がコーナーに置き、1軒が竈と対向方向の張り出し部となっている。

2期はやや増加して17軒存在する。竈の設置壁は東壁が5軒と減少し、北壁が7軒になり東壁を上回っている。他は北東壁2軒、南東壁、西壁、北西壁がそれぞれ1軒である。貯蔵穴を保有する住居は16軒ある。引き続きコーナー部に置く例が多く11軒認められる。また竈の対向方向の張り出しに設ける住居が3軒、竈の対向壁の内側が1軒、竈とは対向関係のない南壁の中央内側にくるものが1軒である。

3期は集落の盛行期と考えられ、27軒が対象になる。竈の設置壁は、この時期の3分の2に相当する18軒が北西壁である。他は北壁が7軒と、西壁と北壁が各1軒にとどまる。貯蔵穴の保有はやや低下傾向を呈するものの、23軒に設置されている。コーナー部への構築は明らかな減少を示し、これは3軒にしかみられない。代わって竈の右側が19軒と大部分を占めている。もう1軒は竈の右側と対向側の2か所に設ける住居である。

4期も盛行期で24軒が対象となる。竈の設置壁は北西壁主流の傾向が継続し17軒と多くを数える。北壁と西壁も存在するが、4軒と3軒にすぎない。貯蔵穴を保有する住居軒数は14軒である。前時期までと比較し、明らかに減少している状況を呈する。その中で竈右側に設置する住居が11軒と圧倒的に多くを占め、他は左側2軒、コーナー1軒となっている。

5期は住居軒数が5軒に減ってしまう。竈の設置は、北壁と西壁が2軒ずつと北東壁が1軒である。貯蔵穴を設ける住居については1軒も確認できない。

千葉市大道遺跡

複作遺跡とは谷を挟んだ南側の台地に所在する。全体の一部分の調査ではあるが、古墳時代の集落が発掘されている(註9)。発見されたこの時期の竪穴住居は7軒で、すべて1期の所産とみなすことができる。

竈を付設する壁は、北東壁と東壁が各2軒、北東・西・北西壁がそれぞれ1軒ずつ存在する。貯蔵穴は全部に設置が認められ、コーナーにもっている住居が4軒と多く、ほか北東壁に竈で貯蔵穴が南東壁中央、西壁に竈で南壁内側、北西壁に竈で対向壁内側がそれぞれ1軒である。

市原市草刈六之台遺跡

村田川中流域右岸の通称草刈台地の南側に位置し、草刈遺跡の一角を占めている。旧石器時代から中世にわたる大複合遺跡で、弥生時代後期から古墳時代後期にかけては継続して集落が営まれる。ここで対象とする時期では竪穴住居139軒のほか円墳2基などが明らかになっている(註10)。

1期は集落が最も盛行する時期と考えられ、50軒を対象に据えることができた。本期における特徴は、西壁以外のほかの方向すべてに認めることができる点である。その中で最も多いのが、17軒存在する北東壁への付設である。12軒の東壁も目立ち、以下北壁6軒、南東壁5軒、北西壁が4軒、南壁3軒、南西壁の2軒とつづく。貯蔵穴を保有する住居はやや少なく、76%に当たる39軒に設置が認められる。位置ではコーナー部が36軒と圧倒的に多くを占める。2か所に設ける住居が2軒あり、どちらもその内の1か所はコーナーに存在する。もう1軒は東壁に竈があり、それと対向する西壁の内側に貯蔵穴が設けられている。

2期に比定できる住居は5軒である。竈のある壁は、北東壁が2軒、北・東・南東壁がそれぞれ1軒ずつである。貯蔵穴は全てにあり、コーナーが4軒と竈の右側が1軒となっている。

3期は11軒である。東壁への付設は認められず、西壁4軒、北・北西壁が各3軒、北東壁が1軒という内訳となっている。貯蔵穴は6軒に確認できる。コーナーは2軒のみで、竈の右が3軒と左に置く住居が1軒となる。

4期も5軒と小規模である。竈を北壁に設置する例が3軒で、西壁と北西壁がそれぞれ1軒である。貯蔵穴を設ける住居は2軒で、コーナーと竈

の右側となっている。

5期は1軒を認めるにすぎない。竈は北壁につくられ、貯蔵穴は存在しない。

市原市中永谷遺跡

草刈六之台遺跡の北側に広範囲に展開する草刈遺跡の南東部の、その東側に対面して立地する遺跡である(註11)。古墳時代後期の集落遺跡で竪穴住居131軒が発掘されており、その中の93軒を調査対象とする。

1期は15軒である。竈の付設される壁は、東壁がやや目立ち6軒を数える。南東壁と北壁も3軒ずつあり、北東・南・西壁がそれぞれ1軒認められる。貯蔵穴は15軒全てに確認することができる。コーナー部が13軒と大部分を占め、他には、東に竈を設け南壁の中央内側に貯蔵穴がある住居が1軒と、東壁に竈を設け、その右になる南東コーナーと南壁の張り出し部の2か所に貯蔵穴を置いている住居が1軒存在する。

2期は40軒を認める。先程の草刈六之台で衰退していた時期である。竈の付く壁は北壁が16軒、北東壁が11軒でここに集中する状況をみせる。また、北西壁が6軒、東壁も5軒存在する。他には南東と南西壁が各1軒である。貯蔵穴は32軒に設けられている。コーナー部への傾向が強く20軒あるが、竈の右側が4軒、左側1軒とコーナーよりも竈に近づくものもある。他は竈と対向する壁の内側が4軒、張り出し部が2軒、東竈で南壁の張り出し部に貯蔵穴という住居が1軒である。

3期も27軒が対象になり、六之台を補う資料を提供するものと考えられる。この時期の特徴は、竈の付く壁が北西になる住居が18軒と増加していることである。北壁も7軒あり、もう2軒が北東壁に設置している。貯蔵穴は21軒に存在し、位置では竈への接近傾向がみられ、右に置く住居が8軒、左が4軒ある。コーナーはわずかに3軒となり、張り出し部などに設置する住居が6軒ある。

4期は集落の衰退期で9軒に減少する。竈設置壁の内訳は北壁4軒、北東壁3軒、北西壁2軒である。貯蔵穴は7軒にあり、竈の右側5軒、左側1軒、北東壁に竈があり南東の張り出し部に貯蔵穴という住居が1軒となっている。

5期は2軒になってしまい、北に竈を置く住居と、北東に設置する住居が各1軒で、どちらにも貯蔵穴は設けられていない。

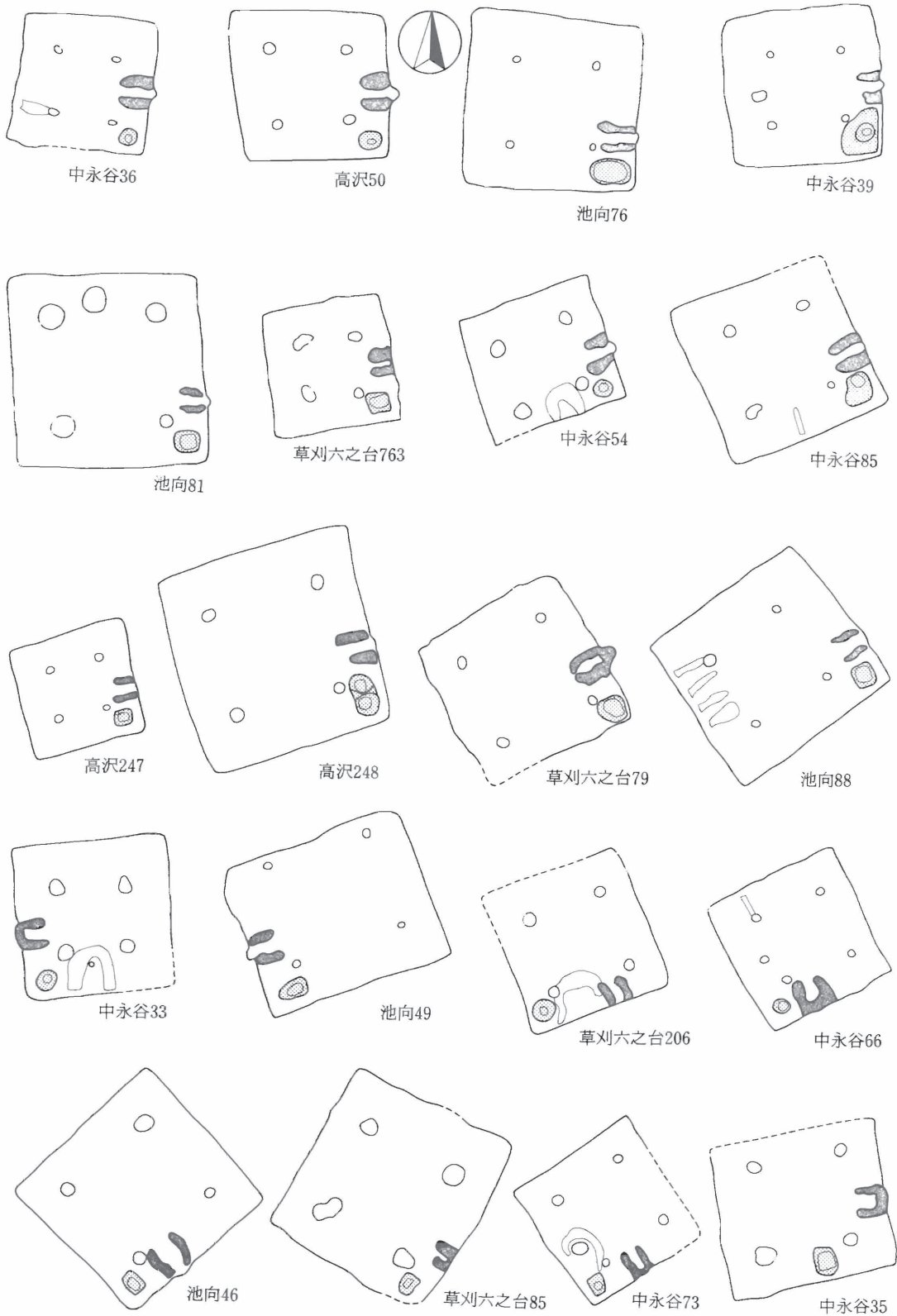


図2 各遺跡の1期の竪穴住居 (1/200)

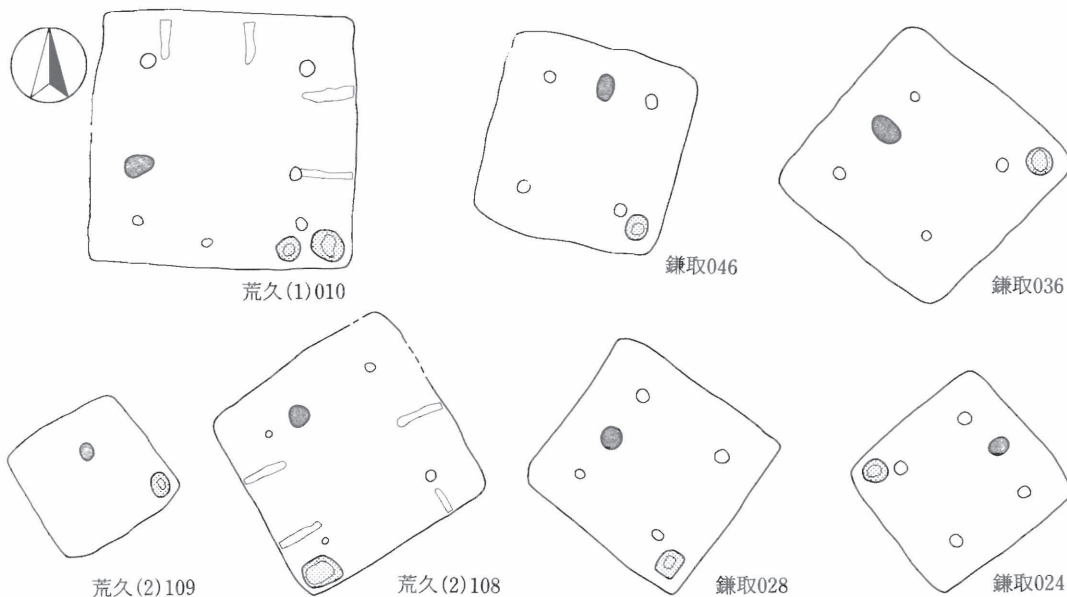


図3 竈導入前の竪穴住居 (1/200)

時期別遺構一覧表

時期	遺跡名	遺構番号
1期	千葉市 榎作	5E、5G、21A、24B、27、28、29A、32B、37B、37F、38、39、47B、49、50、52、58F、60B、85A、89A、111、117B、141、157 160、176
	大道	2、5、8、15、16、20、35
	谷津	9、26、87、100、121
	高沢	50、106、129、130、131、139、175、189、219、247、248、286A、295、326
	市原市 草刈六之台	11、17、19、32、42、57、63、71、79、81、85、86、112、121、122、137、138、143、144、147、150、156、171、180、202 203、206、210、212、234、310、313、373、503、734、762、763、770、786、792、794、795、806、817、823、840、842 883、961、1000
中永谷	4、12、14、19、33、35、36、39、53、54、66、67、73、83、85	
佐倉市 池向	42、43、46、47、49、51、52、57、60、61、63、64、67、70、71、74、76、77、80、81、84、85、87、88、89	
		計142軒
2期	千葉市 榎作	25、32A、40A、44D、47A、58E、88J、125、128、136、151、161、166、179、207
	谷津	8、13、43、58、59、64、70、74、75、81、82、83、93、150、159
	高沢	92、99A、108、138A、148、182、192、200、218、230、249、254、278、284、288、316、320
	市原市 草刈六之台	77、197、203、211、235
	中永谷	3、11、13、17、22、24、27、30、32、34、38、43、48、58、59、60、62、68、69、74、81、82、84、86、89、90、91、92、97、99 102、103、104、105、114、116、119、122、123、128
佐倉市 池向	62、68、79	
東金市 妙経	56B	
		計96軒
3期	千葉市 榎作	5F、37A、37D、44A、44C、59B、61A、86B、90B、107、112、120、122A、131、154、172、177、201
	谷津	7、31、57、62、65、66、69、71、73、77、86、90、101、108、129、138、151
	高沢	101、102、107、112、114、116、126、133、145、151、159、161、166、167、184、190A、193、210B、221、234、240 243、252A、256、257、266、285
	市原市 草刈六之台	65、70、114、196、223、236、424、745、807、818、821
	中永谷	9、18、21、26、28、41、45、46、47、49、51、56、61、65、70、71、87、93、96、98、100、109、113、118、120、124、127
文作	4、23	
東金市 妙経	14、18、20、22、25、47、56A、72、73、100、103、105、106、112	
		計116軒
4期	千葉市 榎作	5D、23、43A、44F、60A、61B、75、88D、90A、93、118、137B、187、190、200
	谷津	18、30、40、42、45、50、53、55、63、84、91、96、102、104、120、134、141、156
	高沢	15、117、118、120、121、158、162、164、183、194、195、197A、202、217、244A、245、250、251、258B、282、303 306、315、337
	市原市 草刈六之台	114、173、247、729、964
	中永谷	2、5、64、75、77、88、106、111、112
文作	36、37、40、51、69、109	
東金市 妙経	1、4、9、12、23、27、33、38、82、86、98、99、109、113、114	
		計92軒
5期	千葉市 榎作	24A、87B、88F、102、119、126、133、146、171A、193A、206A
	谷津	27、36、89、149、157、160、167
	高沢	127、143、180、224、262
	市原市 草刈六之台	221
	中永谷	76、78
文作	29、31、44、48、49、52、67、70、74、78、87、91、108	
東金市 妙経	3、5、13、17、53A、62、66、74、93、96、97、107、120	
		計52軒

5. 画期について

ここまで取り上げた遺跡のほか、範囲を広げてさらに数遺跡調査してあるので、それを含めた結果に基づきそこから読みとれる事象について検討したい。追加する遺跡は、市原市文作遺跡(註12)、佐倉市池向遺跡(註13)、東金市妙経遺跡(註14)の3遺跡で、計9遺跡498軒のデータの集計である。

はじめに竈が設置される壁の向きについて、時期別の変化について確認したい(註15)。まず図4を見て気がつく点は、竈導入から2期までと3期以降とは大きな変化があることである。すなわち、1～2期では東壁への設置が目立つのに対し、3期以降は北と北西方向が断然優位になり、東壁への設置が激減するという結果である。特に1～2期にかけて、わずかながら存在した南東、南、南西の方向はまったく無くなってしまい、北と北西の向きが主流になることに注目したい。したがって、この2期と3期の間に、竈を設置する壁の向きについての、一つの画期を想定することが可能となってこよう。

一方貯蔵穴の設置位置についても、図5から2期までと3期以降に明確な違いを認めることができる。1～2期にかけての貯蔵穴の位置は、住居のコーナー部が多くを占め、3期以降は竈の右側に設置する例が他を圧倒するのである。

図2に1期の竈穴住居の幾つかを集めてみた。このような配置が2期まで残るのであるが、見ようによっては、竈の右側に貯蔵穴を設ける住居が大部分ではないか、との指摘もあろう。しかし筆者は図1に挙げた、榎作の3期や4期にあるような配置関係を、竈の右側や左側といっているものであり、1期の貯蔵穴は住居のコーナー部に設置されている、と見た方が適切であると考えている。

竈導入前の竈穴住居では、炊飯、照明、暖房などの機能を炉が担っており(註16)、弥生時代以来の貯蔵穴も住居内に設けられている。竈導入の前段階の竈穴住居を図3に示したが(註17)、この時期の貯蔵穴の位置はコーナー部が大部分を占める。ということは、竈導入後の図2のような住居であっても、貯蔵穴に着目すれば、その位置については変化がないのである。しかも住居内の炉の方向と、竈の設置壁の方向性との連続性は、積極的には見いだすことはできない。そこで見方を違えれば、竈の右に貯蔵穴が在るのではなく、「貯蔵穴に寄せて竈をつくっている」という解釈も成立するのではないだろうか。

貯蔵穴の用途は、弥生時代以降大きく変貌することはなかったと考えられる。そして竈導入によって期待される効果でも、炉の担っていた機能のうち、炊飯について格段だったはずであるが、基

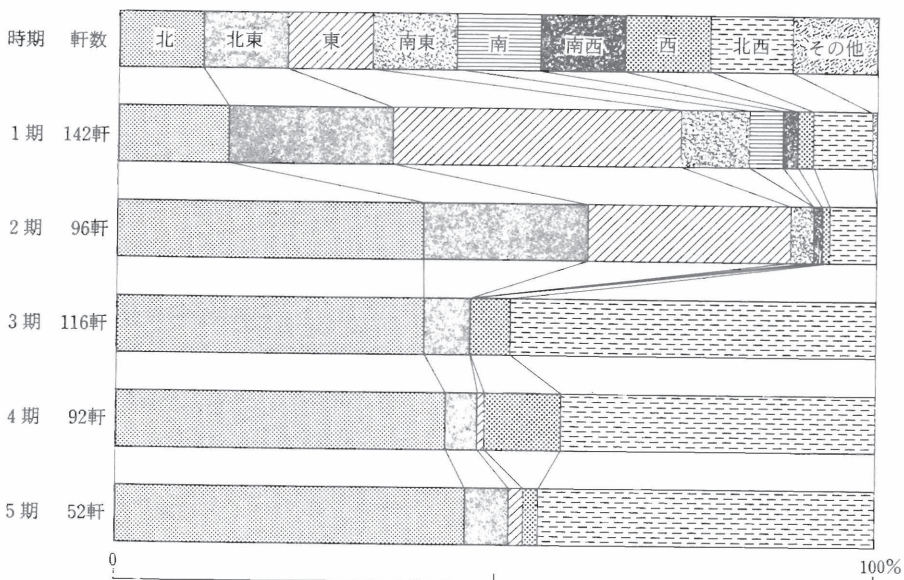


図4 各時期の竈設置壁の方向

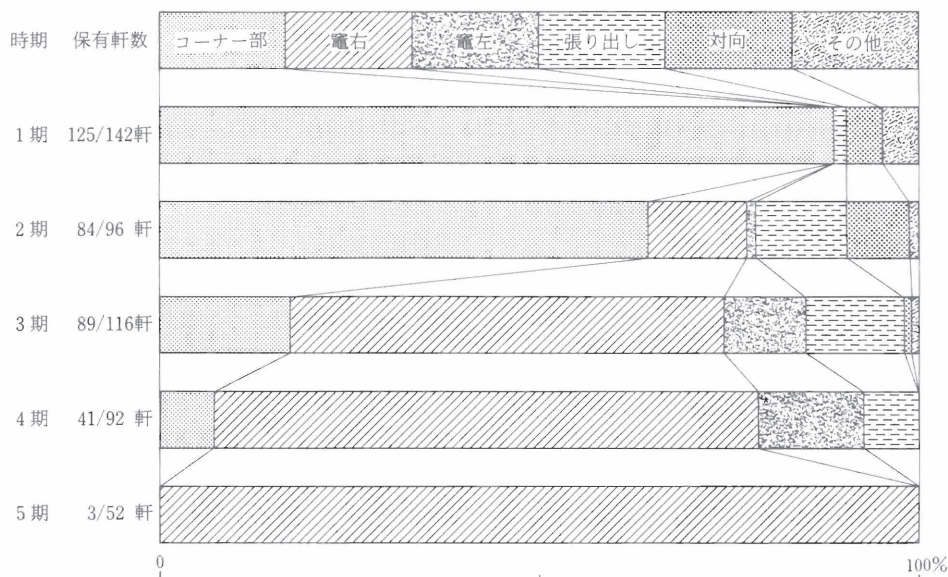


図5 各時期の貯蔵穴設置位置

本的な機能という部分では大きな隔たりは存在しなかったと思われる。決定的な違いは、住居の構造に当初から組み込まれるかそうでないかである。炉は住居が完成した後も位置の決定が容易であるし、また移設も楽である。それに対し竈は固定され、それによって間取りも制約されることになる(註18)。したがって住居のプラン決定時に、竈の設置場所も問題になるはずで、その際に貯蔵穴の配置が優先され、それに基づき竈の配置を決定したのではないだろうか。

では、2期と3期の間に認められる画期の要因は何なのであろうか。筆者は、かつて竈の使用停止に伴い、竈に対して行った祭祀的行為について考えたことがあったが(註19)、竈の設置される方向が北と北西壁に集中する現象にも、竈を取り巻く精神的な規制が少なからず働いたと思うのである。そしてその規制が「住まいづくり」に浸透し、間取り上の伝統的な規制とでもいえる貯蔵穴の配置に変化をもたらし、竈優位になった時期が3期であったと想定したい。

次に現れる画期は5期である。この時期は貯蔵穴の衰退消滅期と位置づけられる。各時期の貯蔵穴の保有率は、1期から3期までは大変高く、4期に至ると低下傾向が現れ、5期には5.7%に激減する。5期を貯蔵穴の終焉期と考えることの蓋然

性は高いであろう。

6. おわりに

当初に掲げた課題のうち、「構築位置の変化」については自分なりの仮説を展開したつもりである。また渡辺修一氏の示したC型からF型への建物構造の変化(註20)についても、基本的な妥当性をもつことを確認することができた。そして竈と貯蔵穴の配置という観点から、3期と5期に画期が認められることを提示したいと思う。

今回のこのような解釈が、妥当性を有するか否か、諸氏のご意見をうかがうことができれば幸いである。

註

1. 小林清隆ほか 1992 『千葉市榎作遺跡』(財)千葉県文化財センター
2. 小林清隆 1993 「村田川流域の6～7世紀の土師器の再検討」『研究紀要14』(財)千葉県文化財センター
3. 筆者は千葉市榎作遺跡の報告書まで「カマド」と表記していたが、千葉県山武郡芝山町の庄作遺跡から出土した「竈神」の墨書の存在などから、最近「竈」と記すようになった。ただ、「カマド」、あるいは「竈」、「かまど」も同一の

- 施設を指していつているので、この点は明記しておきたい。
4. (財)山武郡市文化財センター 1994 「かまどの神様?」『文化財かわら版』第3号
 5. 渡辺修一 1985 「古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間」『研究連絡誌』第11号 (財)千葉県文化財センター
 6. 註2に同じ。概略は次のとおり。

区分	杯類にみられる特徴	想定年代
1期	須恵器模倣杯の黎明期	5世紀後葉
2期	須恵器忠実模倣杯の出現期	6世紀前半
3期	黒色処理手法の出現期	6世紀後半
4期	黒色処理手法の盛行と、小型化への転換期	7世紀前半
5期	須恵器模倣杯の衰退・消滅期	7世紀後半
 7. 村田六郎太ほか 1984 『谷津遺跡』 千葉県教育委員会
 8. 関口達彦ほか 1990 『千葉東南部ニュータウン17—高沢遺跡—』 (財)千葉県文化財センター
 9. 白石 浩ほか 1983 『千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』 (財)千葉県文化財センター
 10. 白井久美子ほか 1994 『千原台ニュータウンVI—草刈六之台遺跡—』 (財)千葉県文化財センター
 11. 白井久美子ほか 1991 『千原台ニュータウンIV—中永谷遺跡—』 (財)千葉県文化財センター
 12. 大村 直 1989 『市原市文作遺跡』 (財)市原市文化財センター
 13. 糸川道行ほか 1995 『佐倉市池向遺跡』 (財)千葉県文化財センター
 14. 糸川道行ほか 1994 『東金市妙経遺跡・井戸谷9号墳』 (財)千葉県文化財センター
 15. 方向についての集計は、真北を0°・360°として、北の範囲を337.5°～22.5°とし、以下時計回りに45°ずつ、北・北東～北西の8方向を割り振り、それに基づいて実施している。
 16. 横川好富 1987 「竈の出現とその背景—埼玉県を中心として—」『埼玉の考古学』
 17. 図3に使用した平面図は、下記の文献に掲載された図を、一部改変して転載したものである。
 - 山口典子ほか 1989 『千葉市荒久遺跡(1)』 (財)千葉県文化財センター
 - 小林信一ほか 1989 『千葉市荒久遺跡(2)』 (財)千葉県文化財センター
 - 麻生正信ほか 1993 『千葉東南部ニュータウン18—鎌取遺跡—』 (財)千葉県文化財センター
 18. 今回対象とした地域には、ある程度完成された形での竈の導入が行われた、という前提に立っている。
 19. 小林清隆 1989 「カマド内出土遺物の意味について」『研究連絡誌』第24号 (財)千葉県文化財センター
 20. 註5に同じ。昨年度筆者は渡辺修一氏と(財)山武郡市文化財センターで職場を同じくしており、その際に氏が担当されていた松尾町「浅間台遺跡」をめぐる、今回の問題について意見を交わす機会があり有意義であった。
 - 渡辺修一 1996 「IIIまとめ 遺構について」『浅間台遺跡』 (財)山武郡市文化財センター